



Rainbow letter

2025.8

No. 46

日本周産期メンタルヘルス学会・ニュースレター

学術集会参加報告

第121回日本精神神経学会学術集会 シンポジウム

2025年6月19日から21日にかけて、神戸にて第121回日本精神神経学会学術集会が開催されました。今回は「周産期メンタルヘルスと小児期逆境体験」をテーマに、5名の先生方から貴重なご講演を頂きました。山下洋先生は「小児期逆境体験（ACEs）と親子の絆形成の困難—マトレセンスの概念からみた周産期メンタルヘルス—」について、上野千穂先生は「若年妊娠の背景と家族の支援」について、寺田周平先生は「小児期逆境体験と予定外妊娠」について、堀弘明先生は「逆境的小児期体験と神経生物学」について、清野仁美先生は「逆境体験を有する妊産婦支援」についてお話しくださいました。

小児期逆境体験の心理社会的・生物学的影響を学び、逆境体験を有する女性が妊娠・出産し親となることに大きな葛藤を伴うこと、そのような背景を持つ女性や家族をどのように支援するかという課題が明らかになりました。精神科医だけでなく、地域の多職種との連携の重要性も再認識されました。

学術集会初日の夜には三宮にて懇親会を開催し、総勢20名で、周産期メンタルヘルスへの熱い思いを語り合いました。来年も多くの皆様のご参加を心よりお待ちしております。

(理事/東北大学大学院医学系研究科 精神神経学分野 准教授/菊地紗耶)



書評『産婦人科医とスタッフのための 精神疾患合併妊娠の診かた』

編著 鈴木利人 (功労理事/順天堂大学医学部附属順天堂越谷病院院長)

佐藤昌司 (理事長/大分県立病院院長)

金芳堂 2025年発行

読んでみて楽しかった！というのが、最初の感想である。本書は産婦人科領域の医師やメディカルスタッフ向けに、臨床現場における妊産婦メンタルヘルスケアの実践を念頭に作成されている。その構成は、①周産期の精神疾患や向精神薬に関する最新の知識、②EPDSの運用方法や注意点、③現場での具体的なQ&A、④地域・医療機関における多職種連携の実践例、⑤将来を見据えたユニークな取り組みの紹介、等から成っている。

単に疾患の説明にとどまらず、患者からどのような訴えがあり、どのような症状が見られるのか、さらにその対応についても具体的に示されているので、とても読みやすく理解しやすい。また本書の特徴のひとつとして、様々な各地域・医療機関の取り組みについて、とてもユニークでチャレンジングな事例まで含めて紹介されているので、読者が自施設や地域の実情に沿った診療や支援体制の改善や、その推進をしていく参考となる。

本書を読めば、産婦人科領域の医師やメディカルスタッフが、妊産婦メンタルヘルスケアの実践に対して、従来のなんとなく「精神科領域は専門外だし…」という奥手な気持ち？の“殻”を破り、自信を持ってさらに前に踏み出すことができる。

レビュアー 西郡秀和 (理事/福島県立医科大学ふくしま子ども・女性医療支援センター教授)



第21回 日本周産期メンタルヘルス学会学術集会

大会長 春名めぐみ (東京大学大学院医学系研究科母性看護学・助産学分野)

2025.9.26(金)-27(土) 一橋講堂(東京) 現地/オンデマンド

<https://procomu.jp/pmh2025/>

8月31日まで事前参加登録受付中です！

「生きる力を
次世代につなぐ
周産期メンタルヘルス」

企画・発行：日本周産期メンタルヘルス学会 情報関連委員会

当学会では会員の皆様にとって有用な情報をニュースレターで取り上げていきます。ご意見やご要望がありましたら事務局までお知らせください。